



瀬戸ヶ谷古墳の出土地状況調査 1943年6月 (〔古墳調査関係綴〕、横浜市史資料室所蔵横浜市各課文書42)

写真でみる昭和の横浜② 瀬戸ヶ谷古墳の“発見”

市史資料室が所蔵している写真、収集した写真を、順次紹介していきます。

一九四三(昭和一八)年、保土ヶ谷区の軽部三郎さんは、丘状の所有地を開墾して「蔬菜圃」にしようとしていた。すると、南側の傾斜地から円筒形の土器や大小の破片が多数出土した。そこで、横浜市市民博物館長・神奈川県史跡調査委員の中道等に調査を依頼した。中道が観察すると、それは埴輪の破片で、埋没している部分を取り出してみると、埴輪の頭部で顔が完全な形で残っているものであった。軽部さんは、これは横浜市内では未曾有のことであり、その丘状の土地は見たところ前方後円墳らしいと感じ、開墾を中止し、略地図・埴輪の写真添えて県に届け出た。その際、速やかにしかるべき所で調査し、学術研究の資料として、また、史跡としての価値などの研究をして欲しいと付け加えている。このように軽部さんは「古墳発見届」(昭和一八年六月



出土した埴輪 1943年6月 (〔古墳調査関係綴〕、横浜市史資料室所蔵横浜市各課文書42)

二日)に記している。横浜市市民博物館評議員(元横浜史料調査委員)であり、現職市議の素早い対応であった。

この一報が届けられると、神奈川県史跡調査委員に調査を命じた(九日)。上の写真は、中道等の調査報告書につけられたものである。出土した埴輪については、実物大写真図と写真(右の写真等)が添付されていた(以上、「古墳調査関係綴」、市史資料室所蔵横浜市各課文書四二)。

その後、県史跡調査委員の赤星直忠と帝室博物館の神林淳雄が調査し、埴輪の詳細を確認した。しかし、太平洋戦中であつたために、本格的な発掘調査は行われず、一九五〇(昭和二五)年になり埴輪が国立博物館に購入されたことを機に、国立博物館と県により発掘調査が行われた(『図説横浜の歴史』一九八九年、五四―五五頁)。(百瀬敏夫)